

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2016年3月20日

[テーマ] 子育て 周囲の理解あってこそ

仕事上、夜の会合に出席することが非常に多く、話に夢中になって時間を忘れてしまうことも少なくない。すると、「そろそろお帰りになってください。坊ちゃんたちが家で待ちくたびれていますよ」と時間を教えてくださる方が必ずいる。「そうでした。おかげで2人の息子を風呂に入れることが出来ます。ありがとうございます」とそそくさと周囲にあいさつをして、私は会合を途中退席する。

このように周囲の方々のサポートと理解があって何とか日々を過ごしている。子育ては自分たちが躍起になってどうにかなるものではないと改めて感じる。

金曜日の夜、体調が悪いことに気付いた。妻も同様だと言う。早く眠りにつこうとそれぞれの部屋に分かれてから小一時間、急に腹痛や吐き気が襲ってきた。腹痛は周期的に強まっていく。熱も出てくる。痛みをこらえるので精いっぱい、別室で生後7か月の次男と寝ている妻に助けを求める余裕もなかった。

東の空が白み始める頃になって、ようやく症状が幾分収まってきた。そこで、手もとにあるスマートフォンで症状を検索し、自分が「おなかの風邪」にかかったらしいことを知った。それから数時間して、知人の医師に症状を訴えたところ、同様の意見であった。

実は長男は木曜日から機嫌が悪かった。いつもは旺盛な食欲も衰えていた。ただ、そうしたことは時々ある。熱は上がっていなかったのも、土曜日の午前中まで待って小児科の先生に診てもらおうつもりであった。長男がどこかでもらってきた病気に家族が次々かかってしまうということは初めてではない。すぐにも警戒モードに入るべきであったが、油断していた。私は連日、甘える長男と同じベッドで寝ていた。

この冬は、私を除く3人がやや重い症状を示しても、私だけは発症しなかった。はっきりしていることは、授乳中の母親は体力が落ち、風邪などを引きやすいこと。自分が感染を免れてきたことについては、予防策を怠らなかったこともあるが、連日の会合で息子たちと接する時間がやや少なくなっていたことが関係しているかもしれない。

今回、他の3人は私に比べると軽症で、妻は、数か月前に同じような風邪にかかったことで免疫が出来たのかしらと言っている。私はその時には全く何ともなく、免疫がつかなかったため、症状が重くなったのだと言う。長男と接する時間を取れるようになってきた

がゆえに苦しい思いをしたとすれば、それはそれで良いと考えるべきなのだろう。

育休取得を宣言した国会議員が女性問題で辞職した影響で、最近、会合を途中退席する時、「イクメンとか言って、支店長、ちゃんと家にまっすぐ帰らないとダメですよ！」と声をかけられることが多くなってしまった。もちろん、周囲の理解が後退した訳ではない。私からの返事はいつも同じだ。「安心してください、ちゃんとやっていますよ！」

〔 日本銀行前橋支店長
 神山 一成 〕